

第3回

石岡市文化財調査報告会

平成29年10月28日(土) 午前10時～

常陸風土記の丘 研修室 ※先着50名 当日入園無料

発掘調査速報展

石岡を掘る3

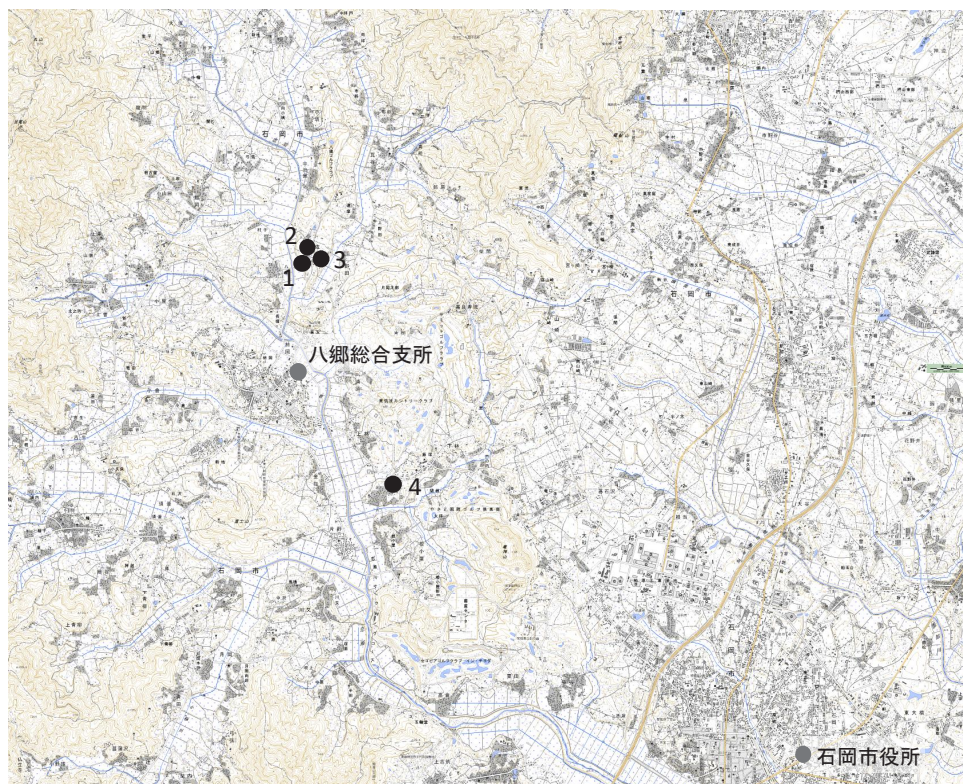
開催期間 平成29年9月22日(金)
～平成29年11月26日(日)

会場 常陸風土記の丘 展示室

休園日 9月25日
10月2日, 10日, 16日, 23日, 30日
11月6日, 13日, 20日

開園時間 午前9時～午後5時 (10月31日まで)
午前9時～午後4時 (11月1日から)

入園料 大人(16才以上) 310円
小人(6才以上16才未満) 150円



1. 佐久の大スギ 2. 佐久上ノ内遺跡 3. 佐久松山遺跡 4. 宿畑遺跡

●例言●

本冊子は、2017(平成29)年9月22日～11月26日を会期として、常陸風土記の丘展示室において開催する「石岡を掘る3」に際して作成したものです。

展示及び本冊子の執筆・編集は、石岡市教育委員会 文化振興課(茂木雅子・谷仲俊雄)行いました。

本冊子で使用した地図は、国土地理院数値地図25000から部分転用いたしました。

●ご協力・ご助言をいただいた方々●(敬称略)

株式会社橋本園芸 佐久の大スギ保存会 関東文化財振興会株式会社
株式会社東京航業研究所 公益財団法人茨城県教育財団

佐久の大スギとは

佐久の大スギは、正確な樹齡は不明ですが、伝承によると大化の改新(645)の頃、朝廷からこの地方に派遣された人物の後裔が^{こう えい}お手植えしたとされています。また、^{おう えい}応永34年(1427)11月に神社が創建された頃、「すでに千年に近い杉」といわれており、元禄16年(1703)に武甕槌尊を^{みかづちのみこと}迎^{げい}祇^ししたときは「千年を越す巨木であった」といわれたことが、今も語り継がれています。



県指定天然記念物「佐久の大スギ」
昭和16年3月16日指定
推定樹齡:1300年
樹高:25.0m 幹の太さ:8.75m

この他にも、正確な時代は不明ですが、佐自塚にまつわる伝説の中で「大杉神社」と呼ばれる呼名の場所が登場したり、戦時中は、出兵する兵士が神社に武運長久を祈願し、この樹皮をお守りにして戦地に赴いたという言い伝えもあるなど、長い間、地元の守り神として親しまれてきたことがわかります。

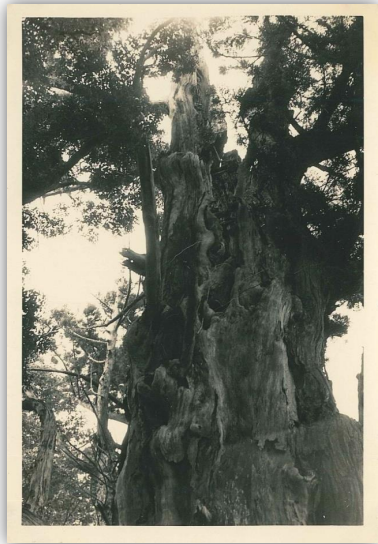
大スギを守れ

長い間地元を見守り続けてきた大スギですが、高く伸びているため、他の樹木よりも落雷や風雪の被害に遭いやすく、特に昭和41年の台風では、枯損した上部10mほどが倒壊する被害を受けました。

昭和45年に発行された八郷町誌では「余命いくばくもないのが惜し

まれている。」との記述があり、一 ▲昭和年間の大スギ(撮影年不明)
時は枯れる寸前になっていたことがわかります。しかし、そのまま枯れ行くのを見ていられないと、地元が立ち上がり、平成9年度から樹勢回復事業じゅせい かいふく じぎょうを行うにいたりました。

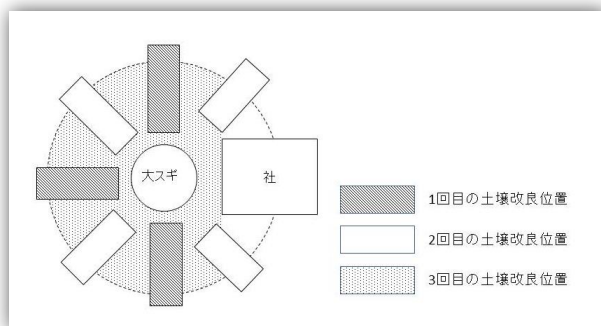
平成8年度からの樹木診断では、土壌の状態やゴンドラを使って上空から状態の観察を行いました。その結果、大スギの南側外部の樹皮が大きく離脱している他、主幹の上部に大きな開口部があり、主幹内部にできた大きな空洞には、腐朽した落ち葉等の大量の堆積物があることがわかりました。また、土壌についても、固く踏みしめられ、水や栄養が大スギに伝わりにくい状態になっていることがわかりました。



じゅ せい かい ふく じ ぎょう 樹勢回復事業①

平成9年度から始まった樹勢回復事業では、まず土壤改良が行われました。土壤改良は、根を傷めないように注意しながら土を掘り起こし、堆肥とよく混ぜ合わせ埋め戻す作業を行います。これを土の様子を観察しながら3か年にわけて行いました。土壤改良では、有機肥料のほかに無機系の土壤改良資材を土に与え、土壤の保水性や通気性などを高め、土の硬さを改善する措置も行われました。

平成10年度には、2回目の土壤改良作業の他に、落下する危険性がある枯れ枝の切除を行いました。



▲土壤改良作業の計画図

平成11年度には、金属支柱枝受けと避雷針の設置工事が行われました。枝受けを設置した大枝は、大スギから延びる大枝の中でもいちばん大きな枝で、全長は16.70m、枝の太さも付根位置で直径90cmを超えるものでした。支柱の取付位置付近での枝の重量は1.5t以上もあり、落下や樹幹割れを防止するために設置されました。このような大掛かりな金属支柱の枝受けは全国的にも前例がない、先進的なものでした。

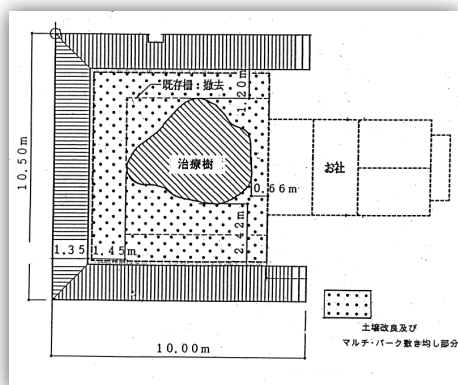
じゅ せい かい ふく じ ぎょう 樹勢回復事業②

避雷針は、主幹の上部に設置され、金属支柱の枝受けを利用して受けた雷を地面に導くように設置されました。

事業最終年度である平成12年度は、主幹内部の空洞に蓄積した堆積物の除去と、開口部の閉鎖を行いました。開口部の閉鎖作業は、特殊樹脂を用いた接合を試みしました。このような大きな面積の閉鎖作業は、前例がありませんでしたが、結果として想定よりも長い間木を守ることができており、画期的な取り組みだったと考えられます。



▲開口部閉鎖作業



▲見学用歩路の計画図

また、この年度は土壌改良作業^{けん がくよう}の3回目が行われ、さらに見学用^{けん がくよう}歩路も設置されました。見学用^{けん がくよう}歩路は、土壌改良した土が再び踏み固められるのを防止するとともに、地表面に適度な湿度を確保するという役目もありました。

今回の事業概要①

今回の事業は、大スギそのものに関わる「樹勢回復事業」と周
囲しゅうへんに関わる「周辺環境整備事業」の2つにわけられます。

■樹勢回復事業

①危険枯損枝の切除

平成10年度の枯損枝こ せん えだの切除から18年が経過けん がく よう ほ ろし、見学用歩路のなどに大枝から延びる枯損枝こ せん えだが多くみられるようになっていました。大スギの腐朽の状況や近年の気象状況等も鑑みて、この枯損枝こ せん えだを切除しました。



▲現在の佐久の大スギの様子

②避雷針修復整備

平成11年度に設置された避雷針は支柱を支える支線の1本が外れ、強風により折れ曲がっていました。今回の整備では、変形した支持管の取り換えを行い、支線の調整を行いました。

③金属支柱枝受けの調整

主幹から延びる大枝の成長により、枝受けに取り付けてある結束器が枝に食い込む状態でした。今回は、この結束器をゆるめ、再び枝がある程度動けるように調整しました。

こ ん か い じ ぎょう が い よ う 今回の事業概要②

しゅうへんかんきょうせい び じ ぎょう ■周辺環境整備事業

けん がく よう ほ ろ ①見学用歩路の修繕

けん がく よう ほ ろ
見学用歩路も設置から年月が経ち、腐朽が見られるようになりました。今回の事業では、歩路の清掃と腐朽部分の取り換えを行い、滑り止めの設置等を行いました。

②周辺樹木の枝払いと竹の伐採

大スギ周辺には、背の高い樹木が茂り、日光不足や風通しを悪くしていたため、クレーン車を使い枝払いを行いました。また、近くには竹が生えており、竹の根が大スギの中まで蔓延してしまうと、大スギの成長に影響を与える恐れがあったため、竹の伐採を行いました。伐採した竹の一部は、大スギ周辺の柵を設置するために再利用しました。

③スギ苗の植樹

竹を伐採した跡地に、景観の補助と、将来防風林としての働きをさせるために、スギ苗の植樹を行いました。



▲植樹されたスギ苗の様子



1



2

- 1 避雷針修復前
風の影響で避雷針が途中で折れ曲がっていました。
- 2 避雷針修復後
避雷針の折れていた部品を取り替え、高さの調整を行いました。



3



5



4

3 金属支柱枝受け

枝受けと結束器で枝が折れないように支えています。枝受けと枝の間に隙間があり、ある程度の範囲で動けるようにゆとりを持たせます。

4 点線で囲んだ部分が、落下する危険性のあった枯損枝です。

5 高所作業用のクレーン車を使い、枝を切除しました。



6

- 6 写真の手前が大スギ側です。
竹林が図の点線の部分まで迫っていました。

7 伐採した竹を用いて柵を作りました



7



8

8 見学の歩路は清掃し、苔などを落とし、階段にはすべり止めを設置しました。

佐久上ノ内遺跡

—古墳時代の豪族居館—

平成25年、農道建設に伴い発掘調査を行ったところ、幅3m前後で深さ1m程ある古墳時代前期の溝を発見しました。発掘できたのは東西方向と南北方向の一部でしたが、航空写真を見ると、東西方向の溝の延長線上に黒い部分が続き、そして南に向かって直角に曲がっています。この黒い部分は、考古学ではソイルマークと呼ばれるもので、地下に遺跡があるために土壌の乾燥状態が異なり、それが反映されたものと考えられます。

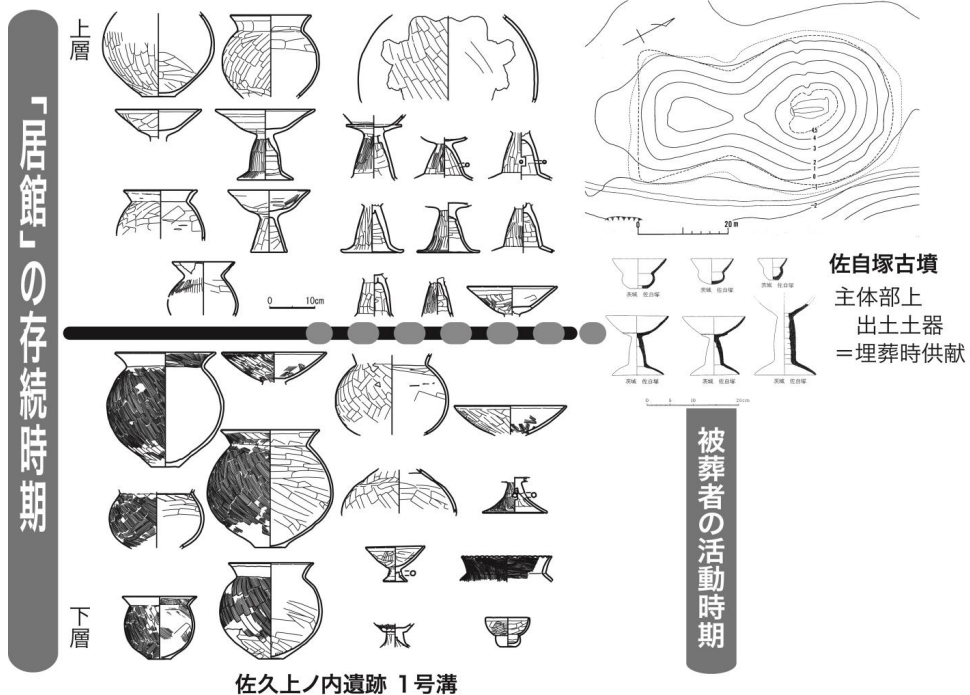


このソイルマークを参考にとすると、東西70m、南北50m以上の範囲を溝が堀のように方形に囲んでいたことになります。このような溝一堀の区画は古墳時代の一般集落では珍しいもので、古墳に埋葬された有力者が住んでいた「豪族居館」の可能性が高く、石岡市では初めての発見になります。

その有力者が埋葬された古墳は、出土した土器の年代から、遺跡の南700m程のところにある市史跡・佐自塚古墳である可能性が高いと考えられます。考古学的な所見から、古墳と居館とのセット関係がわかる極めて貴重な事例と言えます。



▲遺跡の航空写真(写真上が北)
溝の延長線上に黒い部分が続いています。



さ く かみ うち 佐久上ノ内遺跡

—「木」墨書の意味は...—

佐久上ノ内遺跡では、平安時代の集落跡も発掘されました。そのなかで注目されるのは、文字が墨で書かれた土器—「墨書土器」の発見です。

佐久上ノ内遺跡では、9点の墨書土器が出土しています。読解することができない2点のほかは、「木」と書かれたものが5点、「林」と書かれている可能性のあるものが2点。「木」関係のものばかりということになります。

茨城県内でこれまで知られていた「木」の墨書土器は16点、「林」は11点だけ。佐久上ノ内遺跡での出土点数の多さが際立ちます。

今回の発掘調査地点と、「佐久の大スギ」との距離は200mほど。大スギの付近でも土器が採集できることから、佐久上ノ内遺跡の集落は大スギのところまで広がっていた可能性が考えられます。

墨書土器の年代は10世紀。そのころの大スギは、まだ樹齢200年余りでしょうか。しかし、今もその地にそびえる大スギを見ると、両者の関係性を考えずにはられません。



佐久松山遺跡

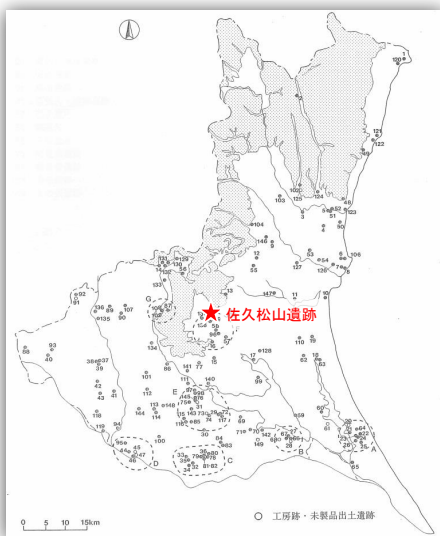
—古墳時代の神まつり—

平成20年、農道建設に伴い発掘調査を行いました。竪穴住居跡12軒や掘立柱建物1棟を発見し、奈良時代から平安時代前半まで連続と営まれた集落跡であることがわかりました。



さらに注目される出土品は、「石製模造品」という古墳時代の祭祀の道具です。「三種の神器」としても知られるように、古代の祭祀の道具として鏡・剣・玉は重要なものでした。しかし、それらは貴重品で、なかなか手に入れることはできませんでした。そこで、代用品として、石で作られたのが「石製模造品」です。

筑波山東麓は、石製模造品の発見が多い地域として注目されています。筑波山に対する信仰は、奈良時代の『常陸国風土記』にも書かれています。筑波山を対象とした祭祀が古くから行われていたのかもしれません。



石製模造品の出土遺跡分布図 ▶

宿畑遺跡

— 集落跡から手付瓶が出土 —

平成18年、県道石岡筑西線バイパス建設に伴い発掘調査を行いました。また、平成29年にも店舗建設に伴い発掘調査を行っています。調査では、縄文時代の狩猟用の陥し穴や、古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡が発見されました。宿畑遺跡の存在する林地地区は、「和妙類聚抄」に記載されている「拝師郷」であったとされており、この集落跡は「拝師郷」の一部と言えるでしょう。



宿畑遺跡の出土遺物のなかには、「手付瓶」と呼ばれる陶器も出土しています。釉薬のかかった精美なもので、東海地方から運ばれたと考えられます。手付瓶は仏様に水を備えるための道具と考えられるものです。その他にも文字の刻まれた紡錘車や灯明皿といった仏教に関係する資料が出土しています。

調査地の周辺には「万願寺」という地名も伝わっており、集落と一緒に寺院も存在していたのかもしれない。



調査地の周辺には「万願寺」という地名も伝わっており、集落と一緒に寺院も存在していたのかもしれない。

◀ 出土した手付瓶

宿畑遺跡

—「九」や「水」の墨書土器と硯が出土—



▲ 墨書土器(右)と土器を転用した硯(左)

宿畑遺跡の平成18年の発掘調査では、16点の墨書土器も発見されています。ほとんどが平安時代(9世紀)の土器に書かれたものです。書かれている文字は地名と考えられるものや役職もしくは

は人名と考えられるものなど、バラエティに富んでいます。なかでも注目されるのは「九」や「水」「一休」と書かれたものです。
おん みよう どう しゅ げん どう まん すう
 「九」は陰陽道や修験道では陽の満数で、悪霊を払い、願い事が叶う力を持っているとされています。また、「水」「一休」と書かれた土器が出土した住居跡の隣からは馬の骨や歯が出土しており、雨ごいなどの儀式に使ったのかもしれませんが。

宿畑遺跡では、硯すずりも出土しています。この出土品はもともとは土器の底の部分です。しかし、墨が付着しており、またつるつるとした墨を擦った痕跡があることから、硯として利用していたことがわかります。専用の硯は手に入らなかったものの、当時この地に文字を書くことができる人がおり、文字を書くためにあるものを利用していたことが伺えます。

文化財調査報告会関連展示・発掘調査速報展

石岡を掘る3 佐久の大スギ特集

平成29年9月22日発行

編集 石岡市教育委員会 文化振興課

発行 石岡市教育委員会

〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1

常陸風土記の丘

〒315-0007 茨城県石岡市染谷1646